

グローバリゼーションと多文化主義

西川長夫

おはようございます。皆様今日は早朝から、しかも多くの方は遠方からお集まりいただきありがとうございます。デュムシエル先生が計画された今回の国際学術研究会のテーマは「多文化主義の多様性」ですが、ここにお集まりいただいた方々の顔ぶれをみただけでもすでに文化的多様性を予感させる、楽しくて思いがけない発見の多い集まりとなることを確信しています。

デュムシエル先生から日本語でよいから、最初に10分ほど短いスピーチをするように申し渡されてしばらく考えたのですが、今回のテーマにかかわることで最近考えていることを二、三、昨年の報告（「多文化主義と〈新〉植民地主義¹⁾」）の補足のような形で述べさせていただきます。あえてタイトルをつければ「グローバリゼーションと多文化主義」となるかと思います。このテーマは現在変容の過程にあるグローバリゼーションと多文化主義という二つの歴史的な現象の定義を含むのでたいへん複雑な問題を取りこんでしまっていますが、ここではかなり乱暴に単純化して、以下の3点にまとめてみたいと思います。

第1点は、多文化主義はグローバル化と一体のものであるということです。私は昨年の報告でグローバリゼーションの定義にかかわって、長期、中期、短期にわたる三重のグローバル化の流れについて触れました。長期とは人類史始って以来続いているグローバル化、中期とは大航海時代、つまり15世紀末以来続いているグローバル化、短期とは現在のいわゆるグローバリゼーションと呼ばれているもので、私はその起点を60年代の後半に置いて考えています。

ところで、この長期、中期、短期にわたるグローバル化の流れは、そっくりそのまま多文化主義に当てはまります。つまり広義の多文化主義は人類史が始って以来、人間が共同生活を始めて以来存在している。この事実は現在広く普及している文化や民族の定義（均質の排他的共同体）をおそらく根底からくつがえすはずです。他者との出会いと共生が文化を生みだすとすれば、多文化主義は文化以前に存在していたと言えるかもしれません。大航海時代以降の西欧の膨張と植民地支配は、新たな多文化主義の始まりです。それは西欧にとっては他者、つまり異文化の発見を意味するが、植民地化された現地の住民にとっては、強制された多文化主義（多文化共生＝他文化強制）です。

多文化主義（multiculturalism）という用語の初出は1965年とされています。多文化主義が多文化主義という用語によって語られる時代の始まりです。この用語は70年代の初頭に多文化主義がカナダとオーストラリアの国策に採用されて、その後世界にひろがりました。多文化主義の先進国はアメリカ、カナダ、オーストラリアなど旧大英帝国の植民地で形成された移民国家です。ヨーロッパ、とりわけフランスの多文化主義の受け入れ方はかなり屈折しています（この点については前回の報告では触れることができなかったのですが、数年前に書いた文章があるのでその英訳を配布させていただきました²⁾）。世界の各地、各国の受け入れ方は様々であり、

それはこの研究会で今日1日をかけてじっくり語り合い議論すべきテーマでもあります。私自身の心構えとしては（a）政策のレベルに限らず住民の生活に起っていることに注目する一方で、（b）その歴史背景や両義性（表と裏、明と暗）、（c）さらには未来の可能性を考えたいと思っています。

カナダやオーストラリアで多文化主義政策が語られ始めたとき、その「理念」は実に感動的でした。カナダのトルドー首相は、二言語主義の枠内における多文化主義政策がカナダ人の文化的自由を保障し、公正な社会の土台となるべきことを語っています。「多文化主義オーストラリアのための全国計画」ではオーストラリアが多文化社会であることが確認され、社会的な正義と公正の追求と、多様性がつくりだす活力と独自のアイデンティティにもとづく新しいタイプの国家作りが探究されていました。こうした理念はさらに追求されるべきものでありましょう。

だがこうした言説の背後に隠されているもの、あるいは語られないものについても注意が必要です。例えば植民地主義の歴史（過去）と今なぜ多文化主義なのかという政策転換の真の理由です。このようにして提起された多文化主義は、先住民にとっては不法な侵略者がおも居座るための口実であり、他者の文化の強制です。ではなぜこの時期に転換が行なわれたのでしょうか。言うまでもなく白人とアングロサクソン中心の植民地主義的体制が、国内的にも国際的にもはや維持できないことが明白になったからでしょう。オーストラリアの白豪主義から多文化主義への転換が「アジア化」のスローガンのもとに行なわれたのはたいへん象徴的です。つまりここでは世界の再編が問題にされているのであるが、私たちはこの「再編」をグローバル化の流れの中に位置づけて考察することができるし、その意味で多文化主義はグローバル化に対する対応であったと考えることができると思います。

残り時間が少なくなったのであとの二点は簡単にまとめます。第2点は、現在、グローバル化は多文化主義の最も強力な起動力であるということ。ここでも顕著な両義性が働いています。グローバル化は世界の均質化を目指す一方で、周辺的なマイノリティの文化の商品化を行なう（周辺に孤立した先住民の芸術でさえも）。多文化主義は多国籍企業のイデオロギーでもあります。国境を越えた巨大な資本は、地上に残された周辺部の多様な物質的＝人的資源を発掘＝開発し、それらを世界的な市場のネットワークに送りこむ。

最後に第3点ですが、私は広い意味での移民の問題をあげたいと思います。こうして形成されたグローバル化のネットワークを通じて世界は人類史上例を見ない移動の時代をむかえました。私たちが現在目撃している文化的多様性はこの移動に直接かかわっています。この移動を可能にした科学技術の発達、人類が到達しえた文明化の先端を示していますがこうして形成された移動のネットワークは、必ずしも人類の夢を実現するものではなかった。人類史上例を見ない移動の時代は、人類史上例を見ない（近代に限定すべきだとは思いますが）格差社会を生みだそうとしています。移動のネットワークは差別と搾取（私はこの言葉をあえて意図的に使っているのですが）のネットワークであることが次第に明らかになってきた。いま振り返ってみれば、カナダやオーストラリアにおける多文化主義宣言は、大航海時代以来続いた植民地主義の決定的な終焉を告げるものであったが、それは同時に、新しい、つまり第二の植民地主義への転換を告げるものではなかったか。私は前回の報告で、世界都市（グローバル・シティ）の機能と国内植民地主義（インターナルコロニアリズム）の概念と現実に注目して、「植民地な

き植民地主義」について述べました。それはグローバル化の一面にすぎませんが、本質的な一面だと思います。

私たちが今日、「多文化主義の多様性」として観察している現象はグローバル化のこのような状況の中で生みだされているものだと思います。おそらく三つのレベルの多様な多文化主義が見出されるのではないのでしょうか。第一はグローバル化の流れによって商品化されて現れる多文化主義。第二は反グローバル化運動の中で意識され見出されてゆく文化的多様性。昨年注目された、フランスの郊外から始った移民第二世代の若者たちによる「暴動」をそのような反グローバル化運動の一例として考えられると思います（サルトルはすでに1970年代に「第三世界は郊外に始まる」と題する予言的な文章を書いています）。ネグリとハートによる「マルチチュード」の概念をこうした反グローバル化運動に重ねて考えることができると思います³⁾。ある種の多文化主義がこのような闘争の中で生みだされている現実がある。多様な形態で現われるナショナリズムもそうした闘争の一種です。ナショナリズムは強力な国家への願望を秘めていますが、国家解体期のナショナリズムはしばしば「ネイションなきナショナリズム」の形をとらざるをえません。第三はそのような闘争の下で静かに進行している住民の生活のなかの多文化主義で、私はそうした動きを映すものとして、言語の問題や例えばカリブ海やカナダで行なわれている移民たちの文学運動⁴⁾について触れたかったのですが、残念ながら持ち時間をこえてしまったので、ここで終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

注

- 1) 西川長夫『〈新〉植民地主義論』（平凡社、2006年）所収。
- 2) The European Integration through Multicultural-Colored Glasses: Issues of Region and Immigration in the EU, in Regionalism and Immigration in the Context of European Integration ed. by MIYAJIMA Takashi, KAJITA Takamichi and YAMADA Mutsuo, JCAS Symposium, Series 8. 1999.（なお本論は西川長夫『フランスの解体？—もうひとつの国民国家論』人文書院、1999年、に収められている）。
- 3) アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート [著]、幾島幸子 [訳]、水嶋一憲／市田良彦 [監修]『マルチチュード』（上・下）、NHKブックス、2005年。
- 4) カナダのケベックに関しては、真田桂子『トランスカルチュラルリズムと移動文学』（彩流社、2006年）を参照。